

## 支那哲學胚胎時代に關する

### 胡適之氏の社會觀察

長 畑 桂 藏 譯

本編は北京大學教授胡適氏の著述に係る中國哲學史大綱中の一節を譯述せるものにして、引用されたる詩經中の各詩篇の訓讀及び譯者の施したる各詩大意は漢文大系並に漢籍國字解を參考とせしものなり。

凡そ一種の學説は決して碧空を劈き突如として天上より墜下せしものに非ず。吾人が仔細に之を研究すれば必ずや此の學説にも幾多の原因及び幾多の結果の有るを知るべし。之を譬へば彼の一篇の文章學説とても畢竟中間の一段落到過ぎずして此の中間の一段落と雖も決して、來るに蹤影なく、去るに痕迹を留めずと云ふに非ず、必ずや上を承け下を起し、前を承け後に接する底の甚だ緊密なる關係を有するものなり。然るに若し其の原因を辦へずんば竟にその眞の意義を知ること能はず、若し又其の結果を辦へざらんか終にその歷史上の位置をも知るに由な

けん。然り而して此の原因中に包含する所の事象は只單に一つのみに非ず即ち

第一、其時代に於ける政治及び社會の狀態(時勢)

第二、其時代に於ける思想及び潮流(思潮)

の二つにして、此の二つの原因は甚だ分別し難きものなり。何となれば時勢と思潮とは相互に因果の關係を有し、或時は先づその時勢ありて始めて思潮を生じ、又或時は思潮先づ有りて時勢は茲に思潮の影響を受け一大變動を生ずるに至る。斯くの如くにして時勢は思潮を生じ、思潮は時勢を生じ時勢は更に新たなる思潮を生ずるものなり。されば學術史上その原因を尋ね結果を求むる研究に至りては極めて容易の業に非ず、吾人が今茲に哲學史を講ずる當り先づ哲學發生時代の時勢と、及び時勢が生ぜし各種の思潮とを研究する決して故なきに非ず。

支那古代の哲學の大家たる孔子出生の年月及び死歿の年月につき吾人の知る所に依れば、孔子は周の靈王の二十一年(西曆紀元前五百五十一年)に生れ、周の敬王の四十一年(西曆紀元前四百七十九年)に歿せり。孔子曾て老子に會す、老子は孔子より少くとも二十歳の年長にして周の靈王の初年(西曆紀元前五百七十年)前後に生れたり。支那の哲學は老子、及び孔子の時に至り方めて哲學てふ二字を冠し得べきものにして吾人は老子、孔子以前の二三百年間を以て支那哲學の胚胎時代と爲すを至便とす。西曆を用ひて算すれば

紀元前八世紀

自周宣王二十八年至周桓王二十年

紀元前七世紀

自周桓王二十年至周定王七年

紀元前六世紀 自周定王七年至周敬王二十年

此の三百年は實に所謂三百年長期戰爭時代と云ふべく、北に戎狄の擾亂、南に吳楚諸國の勃興あり、中原には累年戰爭侵伐の事有らざるはなく、此の間幾多の國亡び幾多の家毀たれ、幾多の人殘はれ、幾多の流血を見たるや擧げて知る可からず。只惜むらくは當時の政治及び社會の狀況は詳に之を考察するに由なければ吾人は僅かに詩經、國語及び左傳等の典籍を參考とし之を研究し當時の概様を窺知するに過ぎず。

第一、此の長期戰爭は國民をして死歿喪亂、流離失踪、實に痛苦堪ゆる能はざらしめし所に於て、一度詩經中の數篇を讀了せば當時國民の受けし艱苦の如何に深刻なりしかを想到し得べし。

蕭蕭たる鵝羽苞栩に集る。王事鹽<sup>もろ</sup>きこと靡<sup>な</sup>し、稷黍<sup>う</sup>を蔬<sup>う</sup>ふること能はず。父母何をか怙<sup>たの</sup>まん。悠悠たる蒼天、曷<sup>いづ</sup>か其れ所有らん。(鵝羽)

(大意) 君子征役に従ひ其の父母を養ふを得ず、仰いで天に訴へ、何れの時か其の所を得征役の苦を免れんと浩歎せり。

彼の岵<sup>き</sup>に陟<sup>のぼ</sup>つて母を瞻望<sup>せん</sup>す。母の曰はん、嗟<sup>ああ</sup>予が季<sup>き</sup>、役に行く、夙夜に寐ぬること無けん上<sup>この上</sup>くは慎しめや、猶來れ棄てらるること無れ。(陟岵)

(大意) 孝子軍に従ひ遠く征し、父母骨肉の離散するを愁ひ山に登り遙かに瞻望し懷郷の情綿々盡くるなきを表示す。

昔我れ往く楊柳依依たり。今我れ來る雨雪霏霏たり。道を行くこと遲遲たり、載渴き載飢ふ。我が心傷み悲む、我が哀しみを知らぬことなし（采薇）

（大意）軍旅往返の勞苦多く、憂愁の情と征役を恨むの情共に看取し得べし。

何れの草か黃ならざらん、何れの日か行かざらん、何れの人か將いて四方を經營せざらん。何れの草か玄からざらん、何れの人か矜ならざらん、哀しいかな我が征夫、獨民に匪すと爲す。（何草木黃）

（大意）連年征戰止むなく、平和の局益々遠くして百姓窮乏すれども君主は毫も之れを察知せず、民を視ること禽獸の如くし君子之を憂懼す。

中谷に薤有り、其の濕を曉かす。女有り仇離し啜として其れ泣く。啜として泣くも何ぞ嗟及ばん。（中谷有薤）

（大意）軍旅頻に起り之に加ふるに歳凶にして饑饉起る、夫婦日に窮迫し夫は終に婦を棄つるに至る慘の極なり。

免有り爰爰たり、雉羅に離る。我が生の初は尙爲す事なかりき。我が生の後此の百の羅に逢へり。尙はくば寐ねて叱く無けん。（免爰）

（大意）桓王信を諸侯に失ひ、諸侯皆之れに叛く。怨を構へ禍を連ね王師敗亡す。君子は其の生を樂まず。

芣の華其の葉青青たり。我れ此くの如きを知らば生る無きに如かず。山羊の墳首三星出

に在り。人食ふべし以て飽くべきこと無し。(君之華)

(大意)西戎東夷交々來りて中國を侵す、師旅並び起り、之れに加ふに年大いに飢ふ、君子周室の將に亡びんとするを憫み又己の之れに逢ふを哀しむ。

第二、當時諸侯互に攻畧し國を滅し家を破るもの其の數を知らず。されば封建制度の種類なる社會階級制度は漸次銷滅し、假令彼の少數の銷滅せざりし階級制度と雖も逐次相互に交通するに至れり。古代封建制度の社會に在りて最も階級制度を重んじたる證左として左傳昭十年辛尹無宇の曰へるあり。即ち

天子經畧し諸侯を正封す古の制なり。封畧の内何れか君土に非らざる、土の毛を食ふ誰か君臣に非らざる。……天に十日有り、人に十等有り、下の上に事ふる所以にして上の神を共にする所以なり。故に王は公を臣とし、公は大夫を臣とし、大夫は士を臣とし、士は卓を臣とし、卓は輿を臣とし、輿は隸を臣とし、隸は僚を臣とし、僚は僕を臣とし、僕は臺を臣とす。馬に圉あり、牛に牧あり、以て百事を待つ。と

一、王 (天子)

二、諸侯 (公侯伯子男)

三、大夫

四、士



五、庶人（皂、興、隸、僚、僕、臺、）

而して此の時代に於ては諸侯に王と稱する者あり、又大夫にも時に諸侯に比し更に權力勢威を有する者あり。之れに反して亡國の諸侯卿諸大夫中に時に奴隸にすら及ばざるものあり。國風に曰へるあり。

式れ微へ式れ微ふ。胡を歸らざる、君が躬に微すんば胡爲れぞ泥中にせん（式微）

（大意）黎侯滅され身を置くに處なく流離して終に衛に假寓す、其の臣歸らんことを勸む

瑣たり尾たり流離の子。叔や伯や衰として充る耳の如し。（施丘）

（大意）黎の君子、國亡びて四方に漂散す、愁怨の餘此の言あり。

又以て當時亡國の君臣窮苦の狀正に想ひ知るべし。國風に

東人の子は職勞すれども來れず。西人の子は粲粲たる衣服し。舟人の子も熊羆これ裘とし。私人の子も百僚に是れ試ひらる（大東）

（大意）階級制度の頽廢に伴ひ漸次貧富顛倒の奇現象現はる。

と云へるに徴しても當時の下等社會中に往往にして一攫巨富を贏ち得て社會の上層に爬ひ上りし者あるを知るべし。論語に公叔文子と其の家臣大夫の僕とは同じく諸侯に升り。春秋の時伯樂の寧威奴隸と賣られし百里奚、鄭の商賈弦高等皆一躍して政治の舞臺に立ち偉功を建てしを見れば當時の社會階級は早く已に従前の如く嚴肅なる限界の存在せざりしな

るべし。

第三、封建時代の階級制度は漸次銷滅に歸したりと雖も其の反動として却つて生活上一種の階級を生じ茲に貧富は漸く不平均となり、富者益々富み貧者益々窮するに至れり。詩經の國風にも窮苦の人の狀を屢々詠じ、孰中貧富の不平均を呪詛する單に數扁に止まらず小東大東杼柚其れ空し。糾糾たる葛の屨以て霜を履むべし。佻佻たる公子彼の周行を行く。既に往き既に來り我が心をして疚ましむ（大東）

（大意）諸國漸く軍旅に困み、財貨盡き風寒の備へ毀空し、生活の脅威を悲しむ糾糾たる葛の屨は以て霜を履むべし。摻摻たる女手は以て裳を縫ふべし。要や襪や好人之を服す。好人提提たり宛然として左に辟く、其の象掃を佩ぶ。維れ是の褊心是れを以て刺を爲す。（葛屨）

（大意）魏國の俗たるや機敏巧智にして利に趨く、其の君も亦貪婪、心褊して德乏し、識者之を諷刺す。

而して此の二篇の詩は英國のトーマス、フッドの縫衣歌の一節に當時の資本家が女工を雇用し、織き女工の膏血を絞りて蓄財の門徑とせしを描出したるに彷彿たり。葛の屨はもと夏季に穿つものなるに窮苦の女工は霜雪の寒む空にも尙之を穿てるを見るに及び流石慈悲心に富みたる詩人は痛罵せざらんとするも能はざりし所なるべし。

彼れに旨き酒有り、又嘉き肴有り。其の隣を治比せて婚姻孔だ云れり。念ふ我獨り憂心

慙慙たり。低低として彼れ屋有り、藪藪として方に穀有り。民今の祿無き天天して是れ稼へり。芻かな富める人、哀しむらくは此の惻獨。(小雅正月)

(大意)彼の小人は美酒佳肴を設け親戚を招き近隣を迎へ共に宴飲するも、祿無き不幸の者は落魄住むに家なく食に穀なく、窮餘終に富者の贅を怨詛す

是等は貧富の不均を怨訴せしものなれども、更に吾人をして深く感動せしむるは坎坎として檀を伐る。之を河の干に實く。河水清くして且漣漪てり。稼せず穡せず、胡ぞ禾三百廛を取らん。狩せず獵せず、胡ぞ爾の庭に縣れる貆有るを瞻ん。彼の君子や素餐せず。(伐檀)

(大意)位に有るもの漫りに財を貪り、功なくして重祿を享く、之れに反し士庶は仕途塞がれて進むに由なく財祿の薄きを刺る。

之れ恰も近時の社會黨が資本家の漫りに他人の辛苦に依り生ずる利益を壟斷するを攻撃せると一般なり。

第四、當時の政治狀態は二三の國を除き多くは暗黒腐敗の王朝政治にして、吾人が小雅の節南山、正月、十月之交、雨無正等の詩を誦せば自ら其の政治の内幕を窺知し得べく又たの數篇の如きも亦其の内幕の一斑を推し得べし。

北門(邶風)

南山、敝筍、載驅、(齊風)

匪風(檜風)

鶉之奔奔(鄘風)

黃鳥(秦風)

候人(曹風)



免爰(王風)

株林(陳風)

就中最も明明白白裏に描寫されたるは左の一篇なり。

人土田有れば女反つて之を有ち。人民人有れば女覆つて之を奪へり。此の宜しく罪無かるべきを、女反つて之を收ふ。彼の宜しく罪有るべきを、女覆つて之を說せり。(瞻仰)

(大意)強權を擁して無辜を虐げ、領田を押收するに非すんば誅求之れ事とし、苞苴の厚薄に掣せられて罪科顛倒する爲政者の墮落腐敗。一篇の歌謠説き得て餘蘊なし。

又最も痛決なるは左に如き莫し。

碩鼠、碩鼠我が黍を食む無れ。三歳女に貫ふ、我れを肯て顧る莫し。逝いて將に女を去り彼の土に適かんとす。樂土樂土、爰に我が所を得ん(碩鼠)

(大意)百姓其の税歛の過重を疾み、暴君の民力を蠶食し其の政を修めず、却つて人を畏るる恰も大鼠の如きを諷せるものにして肺腑を刺すものと云つべし

虐政の逃避すべからざるを歎じ

鶉に匪す鶉に匪す、翰く飛んで天に戻る。鰭に匪す鰭に匪す、潜んで淵に逃る。(小雅四月)

(大意)亂政を畏れ害を避けんとすれども能はざるを懊惱す。

更に憫憐に堪へざるものは左篇に如くものなし。

魚の沼に在るは亦克く樂むに匪す。潛まり伏すと雖も亦孔だ之れ昭なり。憂心慘慘

として國の虐を爲すを念ふ。

此の詩、人變じて魚と成ることも樂趣なしと諷したるを以ても當時の虐政の内面如何に醜陋にして民の怨府となりしかを畧想到し得べし。

是に由り之を觀れば

第一 戰禍連年に及び百姓困苦す

第二 社會階級制度の漸次銷滅

第三 生活現象として貧富の不平均

第四 政治の暗黒と百姓の愁怨

の四現象は當時の概況と認むるを得べし。